

キリスト教神秘主義者の信
仰における病と救いについ
て 第5 部

アベラールの熱情による愛
の病と救い
アベラールとエロイーズ

小泉友美 KOIZUMI
Tomomi

目次

| | |
|---|---|
| エロイズとアベラルの霊的書簡 Correspondance (1132-1133) | 1 |
|---|---|

エロイズとアベラールの霊的書簡 Correspondance (1132-1133)

キリスト教神秘主義者の信仰における病と救いについて 第5部

アベラールの熱情による愛の病と救い

アベラールとエロイズの霊的書簡より Abélard et Héloïse Correspondance (1132-1133)

目次

- Lettre première 第1通目の手紙 友人に宛てられたアベラールの不幸な物語

熱情における暴力 La violence dans la passion

困難

救済の霊 (パラクレ) による救い

隠れた所で祈り、救われる

- Lettre cinquième 第5通目の手紙

キリストの妻であり、キリストの奉仕者であるエロイズへ

慰め

女修道院長としての務めと威厳

アベラールの祈り

- Lettre septième 第 7 通目の手紙

奉仕による救い

メシア (救い主) と聖油

キリストの受難における女性使徒達の愛

はじめに

エロイズとアベラールの霊的書簡 *Correspondance* (1132-1133) は中世フランス文学史において有名です。この作品は 8 通の書簡のやり取りによって構成されています。ここでは第 1 通, 第 5 通と第 7 通の書簡を選びました。多くの聖書の引用があります。第 1 通目の手紙はアベラールが 1 人の男性の友人に過去の熱情による不幸を告白したもので、第 5 通目と第 7 通目の手紙は、アベラールからエロイズに宛てた手紙で、エロイズが修道女になった後も情を断ち切る事が出来ずに、キリストの姿に過去の世俗の愛人 (アベラール) の姿を重ねているのに対し、アベラールはエロイズの叔父から復讐として去勢されるという恥ずかしめの罰を受け、男性を捨て、修道士となって以来、その心は既にエロイズに無く、ひたすらキリスト教修道士としての改心の修道の道を歩んで行く上で、" *Nec me sustineret offendere* エロイズは私を苛む事しかできない" という苦々しい悔恨の心境から遂には " *Nihil mihi reservavi* 私は何も持っていない" という心境が良く表現されています。アベラールのエゴイスト的な面が伺えますが、第 5 通目と第 7 通目のアベラールがエロイズに宛てた手紙には、世俗の熱情の苦しみからどの様に祈りによって救われるか、エロイズの女性修道院長としての威厳を持つ様に、過去に自分に向けられた世俗の愛を、天上のキリストの愛に向けられる様に悟しています。ここでは、アベラールという男性の見方からの熱情による愛の病への信仰の救いに焦点を当てて紹介したいです。

参考文献 " *Abélard et Héloïse Correspondance* " (édition d'Édouard Bouye, 2000 年刊行, 小泉友美 翻訳)

Lettre première 第 1 通目の手紙

Histoire des malheureux d'Abelard adressé à un ami 友人に宛てられたアベラールの不幸な物語

この手紙はアベラール自身の不幸を語っています。

熱情における暴力 La violence dans la passion

アベラールの不幸とは、本来哲学・神学者として知識と哲学的思考 (verba) で動かされる立場である者が、盲目的な熱情に委ねられる事で招いた事です。 (à lâcher la bride à mes passions) アベラールによるとこの熱情による愛の病は、聖書の倫理における聖職者の貞潔の誓いを犯す危険なもの "色欲と傲慢の熱 la fièvre de l'orgueil et de la luxure" であり、この盲目的な人間の熱情によって、自分の神学生であり、愛人であったエロイズの叔父の恨みを買ひ、性器を切断されて、去勢者となった事を後悔して、"神罰 le jugement de Dieu" を受けたと言っています。旧約聖書のレビ記 22・24 によると、去勢者はカミの御前にとって忌まわしい存在であるとされ、また申命記 23・2 内で教会の集会に参加出来る資格条件として、男性の性器が切り取られた去勢者は無効であり、熱情によって犯した愛の罪によって去勢された事の恥によって、俗世に生きる波乱を完全に捨て去る決意を持って、修道士となり、学問の道へと専念してゆき、真のキリストの哲学者として le vrai philosophe de Dieu 生きる事を決めました。

困難

アベラールの人生の不幸と苦しみは、何も完全なものを産み出す事が出来ない、完全を求めても最後まで達成する事が出来ない事より来ています。それは、コリントの信徒への手紙ニ 7・5 の "私達の身にはまったく安らぎは無く、ことごとく苦しんで外には戦い、内には恐れがあったのです。 Au-dehors les combats , Au-dehors les craintes " の言葉の様に、試練によって絶望して、安らぎを持つ事が出来なくなる事です。

休済の霊 (パラクレ) による救い

この絶望の状態にあり、アベラールは聖霊 (パラクレ) の祈りを通して、至上の存在であるひとつのペルソナに自分自身を結びつけさせる事が出来、アベラールの心身の苦しみは人の群れを避け、鳥の囁き、透き通った清水の流れ、爽やかな空気の庭園へと行き、視覚と聴覚を癒やします。アベラールはこのパラクレによってようやく聖なる恩恵 la grâce divine と救いを得ることが出来ました。このパラクレはヨハネによる福音書 14・16 の "天の御父は弁護者 (le consolateur) を遣わして下さるその真理の霊" そのものであります。アベラールの慰めはこの天上の御父よりいただくパラクレによって得られて、私達の肉体 (身体) は聖霊の神殿 (コリントの信徒への手紙 6・

- として、主とひとつの霊として結びついてゆく事が出来ます。

隠れた所で祈り、救われる

苦しみや恥ずかしいという気持ちと、絶望感によって甚だしく気持ちが乱されてしまい、真っ黒な闇に閉ざされてしまったアベラールは、マタイによる福音書 6・6 の"あなたが祈る時は奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい"というこの静かな奥まった祈りの部屋に引きこもって世俗の騒音や動揺から離れて祈りを捧げて、心を安らかにしました。詩篇 54・8 にある様に、全ての心身の感覚は開かれた窓の様に混乱、悪徳 (vice) が入って来る。死もまた、忍びよって来る。(エレミヤの書 9・20) アベラールにとって静かな心を保つ事は真の知識に至る為に重要な事であり、雄弁である事は無価値な言葉 (visions paroles) そのものであり、己を知らなければ他人に説教する資格は無く、盲目な者が他の盲目の者を導く事は出来ないと言います。新約聖書のコリント人への第一の手紙 8・1 内の"人間の知識は人を昂ぶらせるが、愛は造りあげる"と言う言葉を引用して、真の知識は慢心によるものであってはならず、情によって動かされて、昂ぶらせるものであってはならないと言います。この静かな場所に引きこもるという意味は、雅歌 1・4 の文章の"私は黒く火に焼けて、私は美しい"とある様にこの地上における魂の苦しみの果てしない放浪において、太陽の光によって肌は真っ黒に焦がされてしまいます。けれども、この天上の陽の光は、天上の御父の愛の炎そのものであり、この愛によって魂が焦がされて黒く変色する事は名誉な事であり、アベラールはその天の愛を魂に燃やし続ける為にひたすら祈りに専念する事で救いを求めました。

Lettre cinquième 第5通目の手紙

À l'épouse du Christ, le serviteur du même Christ キリストの妻であり、キリストの奉仕者であるエロイーズへ

この手紙は、アベラールからエロイーズへの女修道院長としての自覚と誇りを励ます為に書かれました。

この5通目の手紙の冒頭において、アベラールは既にエロイーズにとっての俗世の兄でも愛人でも無くなり、共に、キリストに仕える者 (le serviteur) となりました。そして、エロイーズが修道女としてキリストに仕える修道院長 (Abesse) としての威厳と誇りを持たせようとしています。

慰め

苦しみ抜いた上でキリストから与えられた慰めの薬 le remède de ma consolation とは、癒やしである。その慰めとは、主がいかに試練の為にアベラールを敵の掌中に預けようが、敵が勝利を得ても、絶えず主を讃える事でエロイーズは罪から解放され、救いを得る事が出来ると言います。

女修道院長としての務めと威厳

アベラールは、テモテへの手紙を引用して、エロイズに修道院長としての威厳と誇りを持つ様に諭しています。" 聖なる寡婦達は夫達の死について嘆いて、あなたはこの地上において、いとこの言う様に哀しみに嘆く寡婦なのでしょう。" (テモテへの手紙 5・3-16) の引用にある地上において嘆く寡婦の如くエロイズは熱情により嘆き哀しましましたが、エロイズは、アベラールと共に天の主人であるキリストの妻となる事で、再び、アベラールの真の女主人 (abesse) となりました。それは、世俗の肉体愛の奴隷では無く、天上の精神的な、キリストに仕える女主人として生まれかわったのでした。本来黒色は、死んだ夫達を寡婦の立場から、別れの哀しみを象徴する色ですが、アベラールとエロイズが身に纏う修道服の黒色は、キリストを救う為の謙遜の色となったのでした。この手紙において、アベラールはエロイズに情念の地上の愛ときっぱりと決別して、その別れを僧衣の黒色に託して、さらにその喪の色が、キリストへの愛に変化した事を告げたのでした。

アベラールの祈り

この第5通目のエロイズ宛ての手紙の終わりに、アベラールはコリント人への第1の手紙 10・13 を土台として、エロイズへの祈りを創作しました。" あなた方を襲った試練で、人間として耐えられないようなものは無かったはずです。カミは真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に合わせる事はなさらずに、試練と共に、それに耐えられる様に、逃れる道をも備えていてくださいます。" (コリント人への第1の手紙 10・13) を土台として、エロイズへの祈りを創作しました。" あなた方を襲った試練で、人間として耐えられない様なものはなかったはずです。カミは誠実な方です。あなた方を耐えられない様な試練に合わせる事はなさらずに、試練と共に、それに耐えられる様に、逃れる道をも備えていてくださいます。" (コリント人への第1の手紙 10・13) アベラールは、罪の赦しをただひたすらにカミにすがる祈りをこう書きました。" 御父よ、この世の創まりより、アダムのろつ骨よりエヴァという女性が創られて、結婚という契約が結ばれました。赦し給え、カミは善良さそのものであり、我が罪を赦し給え。罪人である我を裁き給え。今、裁き給え。この罪人の肉体を鞭打ち給え。善き魂が残るように。

アベラールはこのエロイズに宛てられた祈りの中で、お互いに修道の道に捧げる前に、秘密結婚をした事を、創世記にある男性と女性の誕生と、2人の結び付き (結婚) をこの祈りで暗示した上で、カミに罪の赦しを懇願して、肉体よりも魂の尊重を強調しています。

Lettre septième 第7通目の手紙

この 7 通目の手紙は、エロイーズのキリストに仕える女性使徒として、キリストへの奉仕者としての重要な存在である事、キリストに愛されている価値を誉め讃えています。

奉仕による救い

ルカの福音書 8・2 において聖なる婦人達はキリストに仕える奉仕する者として表現されています。この聖なる婦人達は、マグダラのマリアと呼ばれる女性、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、その他多くの婦人達も一緒でした。この聖なる婦人達はキリストに従い、付き添って歩き、旅を共にして世俗を棄てて、キリストの使徒の共同体の活動に身を捧げました。"キリストは私の遺産 Seigneur est ma part d'héritage" (詩篇 15・15) であり、キリストを信じるグループは、心と想いをも 1 つとして、"皆一つとなって、すべての物を共有し、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて皆がそれを分け合っ" (使徒言行録 4・32) 物質的、精神的なものすべてを捨てて、ただひたすらにキリストについて行く事を強調しています。アベラールは、エロイーズにキリストに愛される女性使徒の立場の誉れをこの手紙で讃えています。

メシア (救い主) と聖油

アベラールはこの手紙の中で、聖書内の聖別 bénédiction をする行為である塗油 onction が説明されています。メシアという言葉には、油を注がれた者の意味があり、イスラエルでは王 (サムエル下 2・4) が就任式の時に油を注がれました。後に油を注がれた者は、正しい統世を持ち国を治める理想的な王を示す様になり (

イザヤ 11・1-10)、更にカミの救いを

もたらす救い主を指すようになりました。旧約聖書の詩篇は、詩篇作家によって創作、構成されて、特に詩篇 132・2 はこの塗油を詳しく描いています。"香しい油が頭に注がれ、髭に滴り衣の襟に垂れるアロンの髭に滴った。" 次にアベラールは旧約聖書の雅歌 1・3 に描写されている "あなたの香油、流れるその香油の様にあなたの名は香しい" を引用して、キリストの名 (神名) は聖油の様に香しいと説明しています。ここで、アベラールはキリスト教徒にとっての重要な秘跡である病人の終油の起源が、キリストの女性信徒である聖女マグダラのマリアから由来している事に触れています。このマグダラのマリアのキリストの足へと注がれた香油の行為を、アベラールは女性の尊厳性 la dignité de la femme と称しています。" (一人の罪深い女) が香油の入った石こうの壺を持って来て、後ろからイエスの足元に近寄り、泣きながらその足を涙で濡らし始め、自分の髪の毛で拭い、イエスの足に接吻して香油を塗った。" 本来、国王への油注ぎは男性から行なわれるものですが、福音書において、キリストの足元に油を注いだ女性の役目の重要性を、アベラールはエロイーズに強調しています。

キリストの受難における女性信徒達の愛

アベラールは女性信徒達の最後迄貫いたキリストへの愛の誠実さを多くの福音書の引用を通して表現しています。マタイの福音書 26・ 33 - 35 においてキリストが男性信徒ペトロの裏切りを宣告しています。" はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度私の事を知らないと言うだろう。ペトロは、たとえ御一緒に死なねばならなくても、あなたの事を知らないなどとは決して申しませんと言った。" キリスト本人が、言葉でその十字架の受難を男性信徒達の前で宣言し、女性信徒達は最後迄キリストを見捨てませんでした。アベラールは次の様な福音書の引用をしています。" 男性弟子達は皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。" (マタイの福音書 26・ 56)

ところが、イエスの死にあたって婦人達は遠くから見守り" その中にはマグダラのマリア、小ヤコブとヨセフの母マリア、そしてサロメがいた。" (マルコの福音書 15・ 40-41) キリストの十字架の足元には、唯一の男性信徒である聖ヨハネが他の女性信徒達と共に見守って、一晩中涙を流して付き添っていました。この行為はアベラールによると言葉のみでは無く、全身全霊の行為で表した愛と信徒達の献身でした。

アベラールは、このキリストの死を最後迄諦めずに見守ったキリスト最愛の男性弟子聖ヨハネと、女性信徒達の真実の愛を讃えています。

アベラールはエロイズに宛てた書簡で、俗世を捨て、エロイズへの愛をも捨て、修道士となったその固い決意を、未練の内に仕方無く修道女となり、未だ俗世の愛に未練のあるエロイズに文章を綴る事で表現したのでした。

完

2025 年 11 月 18 日 フランス ブザンソン 祈

キリスト教神秘主義者の信仰における病と救いについて 第5 部

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
